Osaka University Knowledge Archive

Title	メルヴィルのアメリカと惑星 : 空間と時間の広がりのなかで
Author(s)	藤江, 啓子
Citation	大阪大学, 2010, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/57860
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【56】

氏　　名	藤　江　啓　子（ふじえけいこ）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学　位　記　番　号	第　２４０６８　号
学位授与年月日	平成22年３月23日
学位授与の要件	学位規則第４条第２項該当
学　位　論　文　名	メルヴィルのアメリカと惑星－空間と時間の広がりのなかで
論　文　審　査　委　員	（主査） 教　授　森岡　裕一 （副査） 教　授　玉井　　暲　　准教授　片渕　悦久

論　文　内　容　の　要　旨

本論文は、序論、17章からなる本論、および結論で構成された和文215頁、400字詰め原稿用紙換算で約 450 枚に相当する論文である。　本論文は、ハーマン・メルヴィル（Herman Melville, 1819-1891）の作品を通じ、黒人差別、原住民の迫害、南北戦争、独立戦争、捕鯨業、資本主義、ピューリタニズム、北東部田園地帯と大都市ニューヨーク等、アメリカと関わりをもつ様々な問題を歴史的コンテクストや地球的広がりのなかで、すなわち、時間と空間のなかで捉るものである。民主主義や自由、平等を標榜し、経済的繁栄を享受するアメリカにあって、メルヴィルは伝統的で因習的な価値観にたえず問いかけをおこない、人間の内面を深く洞察した。合衆国中心ではないパラダイムを持ったメルヴィルの作品は、アメリカと旧世界、南海、オリエント、あるいは自然との相互照射や相互依存であり対話である。メルヴィルの諸作品は空間と時間の広がりのなかで捉えられる巨視的な惑星思考の文学であるといえる。

第Ⅰ部、第 1 章は、『白鯨』において白の優位と黒の劣位という白人が生み出した伝統的価値観に疑問を投げかけたメルヴィルが、多様な価値観を持つようになった現代アメリカ社会を予見していたと結論づける。第2章は、多文化主義とグローバリゼーションという今日の問題を、「一」と「多」のせめぎ合いによって創出される開かれた空間「境界領域」の問題と捉え、メルヴィル文学が 19 世紀においてすでにそうした空間を創出していたとする。第3章は、黒人差別の裏にある白人優越主義の欺瞞を批判し暴いたものである。第4章は、古風で壮大な叙事詩的悲劇でもある『白鯨』が、当時のアメリカの捕鯨産業を忠実に描きつつ、科学と虚構、史実と神の神秘の狭間に生まれた作品であるとする。第5章は、『ピエール』を材料に、自己のアイデンティティを求める主人公の心の旅が、北東部田園地帯をこえて地球の奥深くまで入り込むことを指摘している。第6章の『イズラエル・ポッター』論は、英雄崇拝の強いアメリカにおいて、無名と貧困のうちに生涯を過ごしながら高い人間的美徳を持った主人公を讃えることによって、メルヴィルの言う「ルースレス・デモクラシー」が作品化されていることを明らかにする。第 7 章の「バートルビー」論は、資本主義／近代化の犠牲者である主人公に南海の原住民のイメージを重ね合わせ、そこに人間性を読み取る試みである。第 8 章は、『信用詐欺師』の社会的背景を解明し、世俗的成功と精神的美徳が結びついた中産階級の価値観に対するメルヴィルの批判を読み取る。第9章は、南北戦争は「根源的不条理」あるいは「時間の浪費」であると見なす自らの悲劇的歴史観に基づいてメルヴィルが『戦争詩集』を書いたことを明らかにする。

第Ⅱ部、第10章は、『レッドバーン』を旧世界としてのヨーロッパと新世界としてのアメリカの国家的アイデンティティを、父と子という家族関係と重ねて読むものである。第 11 章は、『ビリー・バッド』をポストコロニアルなテクスト、すなわち、ビリー個人の離脱の物語を、アレゴリカルなアメリカの脱植民地化の物語として読む試みである。

第Ⅲ部、第 12 章は、同時代のロマン主義や超絶主義を否定したメルヴィルが、都市化への批判の視座を据え、異教徒の住む南海に複層的な逃避を試みたことをポストコロニアルの視点から論じる。第13章は、都市のヴィクトリア朝文化と南海の社会を対比させ、『タイピー』出版に際してメルヴィルが直面した当時読者層とのディレンマを論じている。

第Ⅳ部、第14章は、『クラレル』におけるメルヴィルのオリエント観を探り、それをうけた第 15 章では、メルヴィルの楽園願望を、飲酒、女性、余暇といった観点から、東洋と西洋の対話であると論じる。堕落したアダムとイヴに示された西洋のキリスト教的救済と楽園回復は、節制や勤労を勧める。それに対し東洋、あるいは異教の楽園は解放的である。厳しい道徳を強いる西洋人が、実は異教徒を政治的にも経済的にも搾取するという実情を鑑みる時、禁欲的なキリスト教道徳に対するメルヴィルの懐疑が論じられている。

第Ⅴ部、第 16 章は、これまで無視され周縁化されてきた自然にメルヴィルが光りを当て、新しく肯定的な意味を与えたことを明らかにし、第 17 章では、自然の観点から楽園回復を希求するメルヴィルの意図を『雑草と野草、一本か二本のバラと共に』の分析を通じて解明する。そして生命中心主義に立脚したメルヴィルを再評価すべきであると結論づける。

論文審査の結果の要旨

本論文の最大の貢献は、従来より論じられてきたメルヴィルを巡るさまざまな問題、たとえば、『白鯨』における白/黒の対比、旧世界と新世界の緊張関係などといった主題が今日的視点で再解釈されていることにくわえ、メルヴィル自身の体験に基づく地球的視点に立って、メルヴィルのアメリカ観を捉えなおすという試みである。惑星思考の文学批評という最新の理論に立脚しながら、緻密なテクストの読解、解釈を通してメルヴィルの文明批評を読み説く試みは説得力に富み、メルヴィル研究に新たな光を投げかけることに成功している。とりわけ、『雑草と野草、一本か二本のバラと共に』など晩年の論じられることの少ない作品にまで言及しながら、メルヴィルは、海、北極、ガラパゴス諸島、沼地、パレスチナの砂漠といった荒地を因習的で帝国主義的な自然観から解放し、自然のヒエラルキーを否定するユートピア的世界を再創造したと論じ、くわえて資本主義や産業主義、あるいはそれを裏打ちする功利主義的なピューリタン社会観がいかに自然破壊に通じるかを論じたくだりは、きわめて今日的な意義を持ち、メルヴィルの先駆性を浮き彫りすることに成功していると評価できる。

ただし、本論文に問題がないわけではない。章構成に不揃いがある点や、論述に繰り返しが頻出する点、あるいは、啓蒙的な説明がやや多い点など改善の余地を残している。本論文の鍵語というべき「惑星」という言葉についても、地球や世界という言葉で置換不可能である所以がもっと説明されてしかるべきであろう。最終的にメルヴィルが到達した地点がいかなるものであるのかという点もさらに詳しい説明が必要である。しかし、これらの点は本論文の優れた価値を損なうものでは決してなく、よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。